
間に合ってますから！！

此花タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間に合ってますから！！

【Nコード】

N6596Y

【作者名】

此花タロウ

【あらすじ】

高雄 かほり、二十歳。本人いたって普通の（つもりの）大学生。だが、そうは問屋がおりさない！ありえない秘密を持つ両親に、超絶美女で傾国の乙女な姉、腹黒アクマなスコン弟…うちの家族はおかしすぎる！！もうテンプレも王道も間に合ってます！！え？異世界にてお気楽ご気楽日帰りトリップ、腹黒美形に金髪俺様王子様に嫁取り婿入り希望？？王道、テンプレどんとこい？…もう、お願いですから勘弁して下さい…（涙目）

これは、ごく普通を望む女の子が、普通でない自身の体質と周囲に

巻き込まれる、愛と哀と合の手募集とボケとツッコミのラブコメ風
味？な物語です…。

はじまり、はじまり？

——国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった——

……じゃなくて。

——玄関のいつものドアを開けると異空間であった。腹の音が鳴った——

……正直すぎる、緊張感のない自分を嫌にもなるし、恨みたくもなる……。

何せ自宅の玄関扉を「ただいま」と開けたなら、目の前にあるのは見知らぬ風景。

見渡す限りの花、花、花！青い空、白い雲、そして果てしない花畑！

……一瞬、余所んちの温室にでも出たのかと思いました。

「すみません、間違えましたー！！」

条件反射で即、ドアを閉めましたとも。

だが、脳内でもう一人の冷静なツツコミ家の自分がさかさずツツコミをいれる。おいおい、一体どんな豪邸だよ！と。うちの近所にはそんなものはないはずだし何より今は夜だよと。

だが、我が心の叫びも空しく、音に出では情けなくも切実なそれだけで。

ぐきゅるるるうぐぐう……

こういう異常事態の下、冷たく澄んだ冬の夜空の下で空しく叫んだそれは、再び己の欲求を訴え続ける私の素敵なほどに正直な my empty stomach.

——要は空きつ腹。

だが仕方あるまい、と空いた胃の底で即座に居直る自分がいる。花も恥じらうぴちぴち乙女といえど、腹は減るしお腹も鳴る。是、当然の理。

お腹も鳴らない、トイレも行かないのは少女漫画のヒーローと幼い少女の頭の中のアイドル像だけだ。

大学の帰り、とつくの昔に夜もとつぷりとふけた時刻ともなれば胃が空腹を訴えてもしょうがない。

ごくごく当たり前のこと、人間として当然の欲求であり生理現象だと。たとえ七面倒くさい今現在の状況とはいえど。

人間、腹が減っては戦はできないと言うではあゝりませんか？

同情の余地あり、異議ナーシ！

独り胸の中、壇上の上から叫び、シュプレヒコール。会議は踊る、そして進みますとも。（何せ一人脳内会議ですからねー。敢えて言うならば「サクサクいこうぜ！」）

そして一人で可決し、これまた一人で心の演壇から降りる。

終わり、おしまい。これをもって第1回脳内会議に幕を下ろす。

そこで一礼。

紳士？としての嗜みだ。うむ。

といっても脳内ですがね。私は女だけど女が紳士を気取って何が悪い？いや、そんなことはあるまい。（何かの構文みたいだな、オイ。笑）

右手に持った豚まん（先ほど立ち寄ったコンビニで買った）をアテに、左手に持ったほかほかの烏龍茶の缶でひとまず休憩といきたいところだが、目の前の異常現象を前にふむ、と改めて考える。

現状を把握すべく第2回脳内会議に突入すべく、再び思考タイムへ突入。

暫し、沈黙考というわけ。

だが、豚まんを食べながら、烏龍茶を飲みながらも考えることはできるだろう、何より冷めたらもったいないしね、と自分の中にすっと明確かつ都合のよい解が落ちた。

一石二鳥。空腹を満たすことは脳の活性化へ結びつく。

お腹も満たされ、豚まんは美味しく食べられ、よい考えも浮かぶやもしれぬ。むしろ一石三鳥だ。

というわけで、とりあえず我が家の門柱にもたれながら豚まん食べます。

所謂立ち食い、というやつですかね。お行儀が悪いですがどうかお許し下さいませ。腹の虫がどうにもこうにも切実な状態なんです。先ほどお聞きおよびのとおり、花咲く乙女としてはあるまじき状態なんです。

ほかほかの豚まんにがぶり、と噛みつけばじゅわっと肉汁のジューシーな風味と筍の歯応えのある感触が口腔内に広がる。

あー生きててよかった。

豚まんと一緒に幸せを噛みしめる。そして、こんなささやかな幸せの積み重ねで人は生きていけるのだと思う。

たとえ、目の前にどんな面倒な事象が転がっていようとも。問題の先送りだと、現実逃避だともう一人の私が意地悪くツツコミをいれようとも。

ちなみにものすごく落ち着いているようだけど、ちょっとくらいは動揺してる。

でもね、こんな状況には既になれっこ、なもんで今さら驚いたりはないのだよ、ジエームズ君。（誰だよ、ジエームズって！）

これがベタな少女漫画や物語の主人公ならば「きゃあ」とか「いやあ〜！」と可愛く悲鳴を上げて驚いてみせ、そこにすかさずヒーロー登場、あっという間に問題解決、そして二人は結ばれましたとさ、めでたしめでたし……となるべきなんだろうけれど、生憎私はそんなキャラじゃないし。

可愛げは何処かに置いてきました。

たぶん、母親の胎内に置き忘れてきたか、超絶美人な上に愛嬌まであるという、まさにミス・パーフェクトな姉君様がお生まれあそばされた際に、私の分までごっすりすべて根こそぎ持って行ってしまったのだろう。

残されたのは冷めたピザよりもあやにくくも空しい、超絶現実主義というツツコミ体質だけ。

間違いなく、私は少女漫画の主人公にはなれないタイプだ。いや、なりたいわけじゃないけれど。

……でも、そう言い切っちゃあたり、本当に我ながら可愛げがない。

でもそれはそれ、仕方がないと諦めてる。自分にできること、向いていることをコツコツ頑張る、それが賢い道かと。

「兎の上り坂」、「八仙海を過ぐるに、おのおの神通を顕す」とも言うではないか。

私の場合、目指すはn o t ヒロインb u t ツツコミor傍観者希望！ってやつですかね。

私こと高雄^{たかお} かほり、本日をもって二十歳になりたてほやほや、華の大学2年生は、されど大いなる溜息をつきながらも、目の前の豚まんという唯一の幸福の塊にやけくそばかりに噛みついたのであった。

はじまり、はじまり？（後書き）

メイン連載の上官殿もヒロインもボケボケしてるので、こちらのヒロインは1人ボケツツコミの自給自足、目指してます（笑）

押してダメなら引いてもダメ！

もぐもぐ、ごくり。

手に持ったほかほかの豚まんの最後の一口を咀嚼し、あつあつの缶入り烏龍茶を嚥下する。

食べながら考えるつもりがついつい、目の前の欲望に夢中になってしまった。

……人間、素直が一番ですヨネ、と自分自身に言い訳しながらも。

ようやく人心地がついたところで、ほうつと溜息をついた。

時計はすでに21時過ぎを指し示し、空では当然のように月が顔を出し、冬の星座がきらきらと冷たく私を見下ろしている。

そして、今私がかたれている我が家の門柱前の歩道側から向こうへと広がっているのはいたって普通の日常風景で。

ごく普通の住宅街の街並み、ごく普通の日本の夜の風景だ。

一方、石造りの門柱の陰から我が家を見上げれば、外観的にはいつもと変わらない。白い壁、黒い屋根のいたって普通の見慣れた我が家。

門柱から家の玄関までの間には今のご時世、都内で構えた一戸建てにしては奇跡的なほどにやや広めの芝生の庭が広がっており、石造りの小道が門から例の玄関扉までを導いている。

灯りがついていることから、家の中には家族の誰かがいるのだろう。

だが、庭に面したリビングの扉、もしくは扉によじ登ってベランダから入ることはできない。

なぜなら心配性な上に妻、激LOVEな父親のおかげで、一戸建

てのくせに全居室が内側から自動的に鍵がかかる仕組みになっているからだ。なので外から入ることも、助けを求めることもできないのだ。

しかも全窓硝子が防弾防音の特殊硝子ときた！

……一体どこの特殊訓練部隊が我が家に攻めてくるとでもいうのですか……??

屋根がパカッと開いてバルカン砲がお目見えしても驚かない自信が私にはありますとも。

そして、父親のことだ！！……一体どんなトラップを仕掛けているのか、分かったもんじやない。

しかも、これに関しては父親だけとは限らない！

4年ほど前、私のお風呂を覗こうとした下着ドロ兼変質者がトラップにひっかかった、と聞いた気がする。しかも、捕まえたのが父親の仕掛けたトラップじゃなくて、弟が別に仕掛けてたものだったとお母さんが言ってたような…。

父親だけでなく、弟もかよ！

一体どんだけ心配性で過保護なんだよ、うちらはどこのお姫様だYOー！と当時、なーんにもわかってなかった私は心の中でつつこんだ。

だが、当時まだ中学生だった弟は、変質者がどうなったのか、ちゃんと警察に引き渡したのかと問いかける私に対し、あの綺麗な顔でにっこり微笑みながら

「かほりちゃんは何んにも心配することないんだからね。僕がちゃんと守ってあげるから」

そう言って私の頭を撫でるばかりで、私の問いには何にも教えてくれなかった……。

あのときはよく分かってなかったけど……今となればその可哀そうな変質者がどうなったのやら……想像だにたくありません……！ガクブルガクブル。

それを思い出すと……月明かりに輝く我が家の綺麗に整った芝生が、有刺鉄線で囲まれた危険地帯、対戦車もかくやとばかりの地雷原のように見えてくるから不思議だ……。

暗視スコープを下さい。いえ、あっても通りたくなぞありませんが。

切実なほどまでの空腹が若干満たされたせいか、冷たい空気で頭が冷えたのか、先ほどよりもじつくりとことを考えてみる。

先ほども言ったように、こういった事象には確かに慣れっこではあるが冬の寒空の下に自宅から締め出される、という現状はいただけない。

まったくいただけないですとも。

しかもよりによって記念すべき二十歳の誕生日のこの日に。

きつと我が家族のことだからケーキを準備して私の帰りを今か、今かと待っていていることであろう。

大学のゼミで遅くなるから誕生日のご馳走は明日の土曜にしてほしい、と言ったところ「せめてケーキだけでも腕を振るうわ」と言ってくれた母の優しい顔が、「今日は絶対残業しないぞ」と頭を撫でてくれた父のはしゃぎ顔が、「今日はデートの約束はしないでおいだから」とウインクを飛ばした姉の美しい顔が、「今晚は一緒に過ごそうね」と手を握りしめてくれた弟の眩しい微笑が臉に浮かぶ。

あ、ごめん。

膝の上で喉を鳴らしてくれた白猫のタマとパタパタと尾を振って

くれた犬のフレンダーも忘れてないからね。

——まるで今生の別れでもあるまいし。

よりによって急いで帰ってきた誕生日の夜にこうして寒空の下に突っ立っている自分自身に少しアンニュイな気分なのだろう。

ややもすれば少々気分が落ち込む。

目の前には我が家があるのに、扉の向こうは我が家じゃない。

おかしい。おかしいですとも。

本日をもって二十歳デビューをしたばかりの私は酒を飲んだこと
はないのだから酔っているはずがない。

だが、もしや寝ぼけていたのかもしれない。ぼうつと白昼夢（夜
だけど。笑）でも見たのかもしれない。

まだまだ中身の残った烏龍茶を片手に、先ほど見た異常事態を確
認すべく、再度我が家の玄関扉に歩み寄り、そうつと開けてみる。

……やはり、眼前に広がるは一面のきららしいお花畑。ピンク
に黄色、白に赤に……うつつう。

一昔前の少女漫画ならば揚羽蝶にモンシロチョウが飛び、まっ白
なわんこが走り回ってそうなくらい少女趣味で、すっかりこちらの
夜目に慣れた我が目がつぶれそうなくらい鮮やかな色彩の花畑が広
がっている。

扉を開けばどこかに繋がる。そりや当たり前。

当たり前だの前田 修一……は、小学校のときに隣の席だった男
の子で、給食のときに「俺、鼻からうどん出せるんだぜ!」と自慢
して無茶した拳句、保健室送りに……って違うし!!

何でそんな無駄なこと覚えてる？
今、思い出す？

いや、別に前田君が無駄とかじゃなくって……いや、彼の見せた己が芸を貫き通そうとした意地はある意味尊敬に値するよ？

たとえそれが一銭の得になることでも、尊敬の念で見られるようなことではなくてもみんなを笑わせよう、芸を披露しようとするその心意気やよし。

鼻から出たうどんが逆流しかけ、苦しみながらもなんとか笑って見せた彼はある意味勇者……って！！

あゝ！！やっぱり今はそんなことはどうでもいいから！
話の其れ具合が、滑りっぷりがまさに最近人気の●国流恋愛ドラマのヒロインとヒーローと同じくらいすれ違ってるから！

軌道修正願います。

内角低め、ストレートでお願いします。

……野球の話をしたいではありません。

ついボケという名の現実逃避をしようとする自分自身に即ツッコミを入れる。合の手ぶりず。

あ、野球拳でもありませんよ？え、そんな遊び知らない??

よいこは知ってはいけない、恐るべき大人の遊戯なんです。親御さんに聞いてはいけません……生あたたかい、疑うような視線が返ってきますから。

え？私は何で知ってるのかつて？

……………（黙）

はい！

はい、はい、はい！話がずれてます！戻す、戻す！戻しましょう！！今すぐ、即座に、ご利用は計画的に。

……一人脳内会議が暴走しすぎた。とりあえず深呼吸。反省なら後でもできる、そしてサルでもできるのだから。

ふうふうすーはーすーはー。

一通り脳内暴走した後でくたびれたからか、深呼吸の成果か、だいぶ落ち着いてきた気がする。

さらに気分を落ち着けるためにも、まだまだ掌の中で私に温もりを分けてくれている烏龍茶を再び口に含む。

こういう突発的事態に陥ると分かっていたならば、砂糖たっぷり、ミルクたっぷりなミルクティーを選べばよかったのかもしれない。

鈍った脳をダイレクトに動かすためには、ブドウ糖ならぬ糖分をブチ込むべきなだけだな。

はあ、はてさてどうしたものかしらん。

とりあえず、異空間へと繋がる玄関扉の間にブロックを挟んで開けたまま、先ほどまでもたれていた入口の門柱まで戻った。再度、石造りの柱に背を預け、煌々と照らす門柱灯の灯りを頼りにブーツのつま先をぼんやりと見つめる。

だが既に12月の声を間近く聞いている11月も後半の冬の外の空気はこの肌身には寒すぎる、冷たすぎる。

哀しいことにコート一枚しか着てない身、カイロはおろか手袋もマフラーも持ってきてないぜ。

今頃はあったかいおうちでソファに寝っころびながら膝には飼い

猫のタマ、足元には飼い犬のフレンダーをはべらせながらTVでも見てたはずなのに。

母親の「ケーキ、食べましょう」の一声に胸を躍らせていたはずなのに。

……北風が身に染みるぜ。

これから行動すべき今後の動静に思いを馳せる。面倒事は嫌いなんだよね、とぶつぶつひとりごちながら。

うーん、どうやったらかこれ、元に戻るんだろう、どうすれば本来の我が家に入れるんだろう？

かといって扉の向こう、あの花畑に足を踏み出すのはためらわれる。

いくらこちらの北風が心身を凍えさせつつあるとも。いくらあちらの陽射しがいかにもあたたかで、爽やかに花弁を揺らす空気が、のどかに私を誘っておろうとも。

——嫌な予感がする。すごく嫌な予感。

こういう予感ばかりはたいてい当たる。嫌うちゅうくらいに。

もしもあちらの穏やかな日差しに誘われて、扉の向こうに足を一歩踏み出したが最後……きつとそこは底なしな泥の沼な気がする。

踏み出したら抜けられない、逃げられなさそうだと私の本能、野生の感、第六感がそう叫んでいる。

だから行ってはいけないと。

そう思えば、この我が家の玄関扉という平和かつ見慣れた日常的な物が——扉の向こうにうるわしの花畑を広げて獲物を誘い込もうと口を開けている危険なブツに見えてきた。

ぶうるるるるるる！！

寒気がしてきた。それも、この身を苛む冷たい冬の夜風のせいとは言いがたい、別の意味の寒気だ。

かといって、こんなところにぼうつと突っ立っているのも身体的にも世間の外間的にもよいとはいえないだろう。

ったく、もしご近所のどなたかに見られたならば、完全不審者ではないか。

「高雄さん家のかほりちゃんたら夜にひとりで締め出されてたのよ、一体どうしたのかしら」とか何とか言われて、親切なお向かいのおばちゃんとかに声をかけられて「すみません、扉の向こうが異空間に繋がるんです」とか言おうものなら、即座に奇人変人、まさに電○系の危険人物、可哀そうな子といった、見えないレッテルをぺたんと貼られることだろう。

それは困る。ものすごく困る。

人間関係、およびご近所づきあいはなるべく円滑かつ事なきを得ず平坦に、が私のモットーだ。

そして、もしご近所さんにこの姿を見咎められなくとも、たまたま通り過ぎた他人に家出娘・もしくは空き巣と思われて警察に通報されても困る。

幸い携帯は持っている。いったん扉を閉めて、その後に父か弟にでも助けを求めよう、そうしよう。

もしかしたら私の側から開けると異空間に繋がるだけで、向こう側から開けて貰えば普通に玄関に繋がるのかもしれない。

家族の誰とも連絡が取れなければ24時間営業のファミレスで夜を明かすか、親友の望の家にも転がり込めばいいだろう。

まずはこのいかにも危険なブツ、もとい玄関扉は閉めてしまっ

限る。

善は急げとばかりに今の今まで背を預けていた我が家の門柱からよつこらさと身を起こす。私の体温で僅かに温もっていた石の柱から背を外せば、隙間風が身を切るようだ。

すっかり冷えた身体に唯一の暖でもある、掌の中で熱を発する烏龍茶の缶を握りしめたまま、玄関扉に向かうべく足を踏み出した。ブーツの靴底に残った我が家の庭土がじゃり、とこすれる聞き慣れた音を聞きながら。

とりあえず、薄く開けたままの玄関扉の前に立ち、間に挟んだブロックを取るべく身がかがめた。

邪魔なブロックを外しながら一体、何処の誰がこんな悪戯？をやったのか……ぶつぶつと悪態をつきながらドアノブに手を伸ばそうとしたその瞬間、ジャストナウ、いかにもこういったことをやりそうな、思い当たる人物の名が一人、不本意ながらも心中に思い浮かんだ！

いやいやいや！それはない！！ないって！いや、違っだろう！
お願い、そうであって下さい！！

私自身の心はそれを否定し、拒否したい。面倒ごとは嫌いなんです、派手なことも苦手なんですと。

でも先ほど摂取した豚まんて栄養を、烏龍茶で温度を得た我が脳が、私という主に逆らいフルスロットル開始。

たららららららら。

スロットが脳内で廻る。そしてあつという間にごとん、という音がした。

それは脳内スロットが止まる音。そしてスロットの出口から転げ

落ちたボールには――あの、忘れもしないあの顔が印字されていた。

犯人は奴だ！ まちがない！！

思わず眩暈がした。

くらり、と目の前が真っ暗になる。いや、ドアの向こうの異世界は青空とはいえ、こちらは既に夜だから暗いのは当然だけど。

でもでも、なんだか幻聴も聞こえる気がする。私の名を呼ぶ声が聞こえるような……。

いやいやいや。

幻聴だけでなく幻覚も視える気がするよ……。扉の向こう、花畑の向こうから私の名を呼びながら走ってくる人影が見えるような……
……って！！

ぎゃ　おう　う　う　！　出　！　！　！

「カホリ！ 会いたかったー！！！！って、ちょ、なんでドア閉めようとするの？ 未来の旦那様に何デスカ、その仕打ち！！」

「うっうっうっ煩い、自分の国へ帰れ異世界産ストーカー！！ここは日本です！ 異世界からの変質者の輸出は固辞しておりまーすーかーら！！」

「またまた恥ずかしがっちゃって。俺に会いたかったんだろ。いい子だからその手をドアから離しなさい？」

「ふぬぬぬぬ。やめて下さい！ 新聞も宗教も頭のよくなる薬も金髪

美形も王道もテンプレも間に合ってますから！だーかーらーどうかお帰り下さい——！！」

「またまたー真っ赤になっちゃってーふふふ」

交渉決裂以前に、交渉すらできません！そしてその前にまったくもって会話とすらなりません！いや、なれませんか！！

扉の向こうの花畑側からはい出ようとしてくる異世界産ストーリーカ
ーこと、通称「あ」の字の人（命名、私）とそれを必死に押し返そ
うとする私。

輝く金髪に海のような青い瞳、バックには花畑しよった少女漫画
のヒーローも真っ青、ハリウッド俳優も裸足で逃げ出すそのくらび
やかな美貌と細マツチョな肢体も全てが私には凶悪な肉食獣のそれ
にしか見えません。

怖いですが、助けて下さい、おまわりさーん！ここにストーカーが
いますよー！！いたいけな女の子が狙われてますー！

金髪碧眼、物語の王子様のようなテンプレ美形騎士とこうして家
のドアというごくごく庶民的なツール一枚はさんで押し合いへし合
う女子大生の姿は、はたから見れば滑稽なのかもしれない。

だが、少なくとも私は命がけだ！この両腕に、この瞬間に私の未
来の全てがかかっているのだから、そりや必死にもなろうというも
の。

最近見かけなかったからようやく諦めたんだろう、へへん、ビバ
平和な毎日！と油断してた！しまくってました！！

喰うか喰われるか！私は喰いたくなぞないけれど、向こうは私を
喰う気マンマンだよ！！いーやー！！！！

ギシギシギシギシギシ

我が家のドアがいやゝな悲鳴を上げております。

押し合いへし合い、押し合いへしあい。えいおーえいおーえいえいおー！

小学校以来の綱引きの逆の気分です。あれ、綱引きならぬドア押し、ですかい。

ただし、この場合、私の身の安全と貞操の危機がかかっているだけに真剣さが比じゃない！！はんばじゃないから、へいジヨニー！

（涙目）

こんな殺伐とした、命がけな押し合いは初めてでーすーかーらー。ふぬうつうつうつー！！

しかし、そこはか弱い女の子。異世界成人男子、しかも現役ばかりの騎士の腕力には敵うはずもなく……あっという間に押し負けました。

いえ、押し負けるところか、「あ」の字の人のとんでもない馬鹿力に、扉ごと吹っ飛ばされました……。

「あ」と思つた瞬間、勢い余つて扉ごと後ろに吹っ飛ぶ私。

それを追いかけるように向こうから跳びかかろうと助走する「あ」の字の人の青い目がぎりり、と凶悪な光を帯びたのが見えた。

宙を舞いながらも、吹っ飛びながらも走馬灯のように今日一日の出来事が脳裏をよぎります……だめだ、これぞバッドエンドフラグ。今日こそ誘拐される。やられてしまう……。

助けて、誰か——お父さん、お母さん——鎮^{しづか}！！

「あ」の字の人の手が目の前に伸びてきたその瞬間、思わずぎゅうっと目を瞑る。

だが腕を掴まれるその直前、たくましい何かに、誰かの胸に私は抱きとめられた。ふわり、と嗅ぎ慣れた香りが鼻腔をくすぐる。

——それは私の大好きなサイブレスの香り。

そして、その香りを纏うのは——私の知ってる限りただ一人。ジヤスミンの香りを好む父と母でもなく、ローズを好む姉でもなく——
……。

その瞬間、ぱちり、思わず目を見開いた。

見上た視線の先、私の顔の遥か上から優しくこちらを見下ろすサイブレスの香りを纏ったその人と目と目が合う。

さらさらのこげ茶の髪、紅茶色の瞳のその人は再び優しく私に微笑みかけた後、その綺麗な顔からは出たとは思えないほどの低く、唸るような、威嚇するかのような冷たい声を出した。

「ジークベルト・アルノルト・ヴェンツェル・ブルクハルト・クルト・ライマー・フォルクマール・エルレンマイヤー？……うちのかほりちゃんに近寄るな、と僕は言ったよね？」

頭悪いのかな？それとも耳が悪いの？？若年性の痴呆症なのかな？？あ、全部か。そして悪いのは生まれつきか。

くすくす笑いながら、でも私の頭を優しく撫でながら強烈な嫌味のブローをお腹の底から繰り出したその人は——たかお しづか高雄 鎮。

名字が名字だけに、英語とかで逆に読むと、どっちが名字でどっちが名前だか分かんないような名前ですが、私の弟です。

とりあえず……助かったあ……。

そしてあの長ったらしい名前をよく舌嚙まずに言えるなあ……しかも覚えてたんだ、と思ってしまう私はやっぱりどこかの何かが足りないのだろうか……？

ドアを開けたらそこは異空間な展開と先ほどまでの攻防で疲れ切った拳句、思わぬ救世主に心から安堵した私は、そのままゆっくり

と意識を手放したのだった――・。

押してダメなら引いてもダメ！（後書き）

金髪碧眼美形騎士は王道・テンプレですよ？

しかも名前ながっつ！

腹黒シスコン弟もトラップといい…何だかありそうですw w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6596y/>

間に合ってますから！！

2011年11月20日13時58分発行